

女中フランソワーズを通して見た19世紀末フランスの召使像

荏原いずみ

I

召使 (*domestique*) という階級がフランス社会に実在した20世紀初頭まで、少なくとも文学作品を読む階級に属する人々は、文学作品における召使の存在に彼らの日常生活のきわめて自然な投影を見たことであろう。19世紀以前から文学作品における登場人物の一人としての召使の存在は決して珍しいものではなかった。彼らは主人公たちの打ち明け話の相手となり、道化役を演じ、時には主人を破滅に導く讒言者として主人公の冒険に随行してきた。やがて19世紀後半になって、それまでの文学に登場する召使とは異なるタイプの召使が登場する。それはもはや主人の冒険の随行者ではなく、ゾラの「大地」(1887年)のジャクリーヌのような一つの社会階級としての女中 (*bonne*) の登場であり、また自らが主役となった、ゴンクールの同名の小説のヒロイン、ジェルミニ・ラセルゥー(1864年)やミルボーの「小間使の日記」(1900年)のセレスティヌといった女性の召使たちであった。

ブルーストの「失われた時を求めて」の召使フランソワーズは、ゴンクールやミルボーのヒロインとは異なり、あくまでも脇役である。彼女は、『話者一私』が文学という天職に目覚め、仕事に取りかかるまでの道程の伴侶に過ぎず、その意味では19世紀後半の、自然主義小説より古典劇の召使に近い存在だと言えよう。しかし、彼女は単なる脇役で終わらず、話者の幼年時代に既に孫が居た年齢でありながら、話者の周囲の主要な登場人物が悉く死去するか過去の亡霊となってしまった物語の終わりにも、相変わらず老女中として壮年期の話

者に仕えている。「失われた時」全体を通してこれほど時間の浸食作用を免れている登場人物は不滅のココットたるオデットとフランソワーズだけであろう(1)。さらに彼女は亡くなった祖母や、『サズラ夫人の家にお茶に行った(2)』まま物語から忽然と姿を消した母すら立ち会えなかった話者の創作活動にも立ち会い、「文学に対する直感をもって(3)」話者の創作活動を助け、見守る唯一の人物である。彼女に与えられているこうした特権的役割を考慮すると、自然主義小説の召使像とは異なっているが、「失われた時」もまた19世紀末から今世紀初頭の女性の召使を描いた小説の一つとして読むことが可能であろう。そこで本稿では、マルタン＝フュジエの19世紀末から第一次大戦までの女性の召使の歴史学的研究(4)を手がかりに、フランソワーズについての作品中の記述を通し、彼女が表象しているベルエポックの女性の召使像を分析してみたい。

II

フランソワーズの性格を特徴づけるものは何よりもその献身(dévouement) ぶりであろう。レオニー叔母との様々な駆け引きにも拘わらず、フランソワーズは心の底では女主人、レオニー叔母を「女帝」とも「全能の君主」とも崇める(5)。そして血縁を重視するフランソワーズの価値観からして、叔母の死後仕えることになった話者の一家は、前の女主人の血を引いているが故に高貴な一家なのである。彼女は死の床にある叔母や祖母を看取る時、他の誰かが主人に近づくことさえ許さない。こうした彼女の献身ぶりはジルベルトの母、オデットの口を通して称賛されるほどである(6)。フランソワーズの主人への敬意は、叔母の「小作地の数や、飲み干されたヴィーシー鉱泉の瓶の数(7)」によって窺える富への敬意に由来しているのだが、それは近代の拝金主義による敬意ではなく、マルタン・フュジエの指摘のように、「富は善と共にある」という非常にナイーブな信念に裏打ちされた世界観なのである(8)。フランソワーズのこうした「善き君主」に対する忠誠は、レオニー叔母とのちょっとした応酬をも話者の目にルイ14世とその臣下の応酬を想起させる(9)。

「失われた時」の舞台となっている19世紀後半から今世紀初頭は、文壇においてはジェルミニ・ラセルトゥーやジャクリーヌやセレスティヌといった召使のヒロインが誕生し、現実には召使の減少が問題となり始めた時代であった⁽¹⁰⁾。上記のようなフランソワーズのナイーブな忠実さを、例えばミルボーのヒロインの、貴族やブルジョワ階級への憎悪や軽蔑と比較するとき、後者の憎悪の方がより現実性が高かったように思われる。にも拘わらずブルーヌはフランソワーズを、主人の富を篡奪しかねないライバル(コンブレーにおいてはユーラリや部下の妊娠した台所女中、パリではアルベルティヌ)に対する若干の残忍さを除けば、全く献身的な女中として描いている。今ここで、そのことの意味を考察してみよう。

フランソワーズが一種の理想化された姿で描かれているのはとりわけコンブレーを中心とする話者の幼年時代においてである。話者がはじめてフランソワーズに会うのはレオニー叔母がまだコンブレーに蟄居する前の時代、大叔母のパリの家に新年を過ごしにやって来たときのことであるが、その時のフランソワーズは「壁龕の中の聖女像⁽¹¹⁾」に喩えられている。フランソワーズのこうした聖性はまた、サン・タンドレ・デ・シャンの教会の素朴なゴシック彫刻の瀕死の聖母の周りに集まる天使のレリーフにも喩えられる⁽¹²⁾。彼女の精神世界は、聖王ルイや聖人や騎士王の婚礼や埋葬などで装飾されたゴシック教会のファサードと同様、民間信仰としてフランスの農民の間に脈々と生きてきたプリミティブな伝承に根をおろしているが、その意味において彼女の聖性とは、アンシャン・レジーム下の農民の、王権を頂点とする封建領主への忠誠心を指している。また、「失われた楽園」に相応しく、コンブレーは常にゴシック芸術の架空の宝庫としてフランス史の「失われた幼年時代」をも象徴しているが、その小さな町に君臨するのが封建領主のゲルマント公爵家である。フォーブール・サンジェルマンのサロンの女主人、ゲルマント公爵夫人とフランソワーズの間には一見何の繋がりも無いように見えるが、話者は夫人とフランソワーズの話す言語の地方色や古めかしさ、小動物を平気で殺す残忍さ⁽¹³⁾を指摘して

両者に共通の、大地に根ざした出自を強調している。封建領主の忠実な臣民のひとりであるコンブレーの農婦のフランソワーズは、いわばジュヌピエーブ・ブラバンと同時代を生きているプリミティブな召使である。

コンブレーではフランソワーズの日常を巡るちょっとしたエピソードが語られる。ひとつはレオニー叔母がフランソワーズが盗みを働いていると空想し、盗みの現場をとりおさえる場面を想像してベッドの中で独り芝居をする場面である(14)。19世紀末から今世紀初頭にかけて、実際の召使による窃盗が刑事事件になった件数は非常に少なかったらしいが⁽¹⁵⁾、それとは別に料理番の召使による、**"l'anse du panier"**（商品の値段に水増しをして主人から差額をだまし取ること）や**"le sou du franc"**（出入りの商人と共謀して上乗せした商品の代金の差額をあつて手数料として受け取ること）と呼ばれる習慣が一般的だった。そして、こうした悪習は、主人の側には窃盗の一種と映ったようである(16)。フランソワーズはこの家の料理番で、市場に買い物にも行っていたのであるから、レオニー叔母が盗みと考えているものはこのケースであったかもしれない。いずれにしろ叔母のこの奇妙な一人芝居はフランソワーズに聞こえていたかもしれないが、実際には何の事件も引き起こさず、単に老女の日常のエピソードのひとつとしてユーモラスに叙述されているだけである。コンブレーはあくまでも平和でのどかな楽園なのである。

またコンブレーには「ジョットーの『慈愛』」と綽名されたフランソワーズの下で働く台所女中が登場する。この女中はフランソワーズにいじめられ翌年にはもう叔母の家にはいないのだが、彼女はどうかや未婚の母である。しかも彼女は話者の一家の滞在中にレオニー叔母の家で出産する。このエピソードも我々、現代の読者が読む限り違和感はないが、19世紀末の他の小説の召使のエピソードとしてみればあり得ないことのように思われる。ジェルミニ・ラセルトゥーやゾラの「豊産」のセレストのように、召使が妊娠の露顕を恐れ、主人に隠れて出産するのが一般的だった当時の社会で、未婚の母であることがひとたび発覚すれば、**"Misérable trainée, coquine, voleuse"**⁽¹⁷⁾と

主人から糾弾され家を迫られるのが普通だった。ところがレオニー叔母の家のこの女中は、フランソワーズの迫害を除いては誰からも非難されることなく奉公先で出産する。司祭の訪問をしばしば受け、話者をココットと引き合わせた叔父が「私」の両親と仲違いする羽目になったり、ココット上がりのスワンの妻を決して家に招ばないといった、他の点で19世紀ブルジョワ家庭の道徳を固持している話者の一族が、この女中に対してだけ寛容になるのはいかにも非現実的である(18)。ここにもやはり、平和と寛容に満ちた、失われた楽園のフィクションの世界が見られる。

ところで、上に見た「ジョットーの『慈愛』」のエピソードにおいてこの女中に過酷な態度をとるのは、主人の一家ではなく同じ奉公人のフランソワーズである。彼女は折りにふれてこの女中が未婚の母であること、主人の一家の好意につけこんでいることを非難する。この件でブルジョワの道德観に固執しているのは主人たちではなく奉公人のフランソワーズの方なのだ。こうしたフランソワーズの性格の欠点がよりはっきりと見られるのは理想の楽園コンプレーではなくパリに於いてである。以下、パリでのフランソワーズを見ていこう。

III

19世紀、召使の資質として求められたのは、迅速さ、清潔、細やかさ、節度、サービスの質における洗練といったものだった(19)。召使としてのフランソワーズの優秀さは、話者の母がコーヒーやお湯を所望するとき本当に沸騰している状態のままさりげなく運んで来られる唯一の召使であるというエピソードの中にも(迅速さ、細やかさ)、また話者の父が招待したノルボワ氏を感嘆させた料理の腕前の中にも現れている(サービスの質における洗練)。また清潔さは彼女の白いボネットに象徴されている。この様に、良質な召使であるフランソワーズは当然ながら、家族以外のスワン夫人やノルボワ氏に礼賛されるのだが、その礼賛はフランソワーズ本人ではなく、主人である話者やその家族に向けられるのである。礼賛された当のフランソワーズは、ノルボワ氏を見るため

に出てくることを話者の母に禁止されている(20)。つまり、フランソワーズを称賛することは、彼女自身を称賛することではなく、その主人を称賛することであり、それはいわば招かれた家の調度やペットを称賛するのと似ている。実際に、ヴィルパリジ夫人によれば、旧体制下の貴族の家庭では、将来雇い入れるべき召使は、生まれたときから目をつけて予約をするということも行われていたらしい(21)。つまり、主人にとっての召使はある意味では競走馬や血統書付の犬と同じ性格を帯びていたのである。

召使を称賛されることが主人にとって誇らしいことであれば、自分の召使が他家の召使より劣っていると感じることは屈辱的でもあったろう。少年時代の話者が、ジルベルトを連れてシャンゼリゼにやってくる *institutrice* とフランソワーズを比べてフランソワーズが下品なのを恥じるのはそうした心理である。*institutrice* や *nourrice* は女性の召使の中のエリートであり、彼女たちは他の女中たちに比べて給金も高く、食事の時は子どもたちと同じテーブルに付き、眠るのも屋根裏のいわゆる女中部屋ではなく、主人の子どもたちと同じ階であった。そして家の中で家事をする他の召使たちに比べて子どもたちと外出する機会の多い彼女たちは、給金以外に女主人から現物支給で衣服を贈られることがしばしばあったらしい(22)。また、話者の家では料理も子守も小間使 (*femme de chambre*) もフランソワーズがこなすのに対して、専任の家庭教師や乳母を雇えるのは分業が可能なほど多くの召使を抱えた富裕な家に限られていた。スワン夫人には3人の小間使がいたと書かれているが、実際に1906年のパリで3人の小間使を雇っていたミュラ大公家には総勢35人の召使がいたことがわかる(23)。馬車も持たず、専任の乳母もない家庭の息子である話者がせめてもフランソワーズにジルベルトの家庭教師と同じ服装をさせたいと願ったのは恋する少年のスノビズムであったのだろう。

主人たちが召使を一種のステータス・シンボルと見ていたのに対して、フランソワーズにも召使の側のスノビズムがある。それはまず、マルタン・フェジエの指摘のように、主人の一家の評価によって自分自身の価値を量るという点に

ある⁽²⁴⁾。ゲルマント邸に越して来たフランソワーズが前の家を懐かしがるのは前の住まいでは主人一家が近所でよく知られて立派な一家であると思われていたのに対して、新居では門番が一家を知らず、必要な尊敬を払ってくれないからであり、新参の下男 (*valet de pied*) に対してはコンブレーの以前の主人であるレオニー叔母を自慢する。また、仕立屋ジュピアンを好きになるのは、馬車を持たない話者の一家は経済的余裕がないからではなく、質素な生活を信条としているから馬車を持たないと言ってくれるからである。話者も観察しているように、フランソワーズの自尊心は、主人の一家の「美德や富や暮らし向きや地位⁽²⁵⁾」を糧としている。つまり、忠誠心と、主人一家と自己の同一視は表裏一体なのである。

貴族やブルジョワのサロンのスノビズムとは形こそ違え、パリでのフランソワーズは彼女なりにスノップである。たとえジルベルトの家庭教師とは比較にならずとも、フランソワーズは彼女なりに着こなしがうまく、アルベルティエヌの指輪のデザインにもモードに敏感な女性らしい目を向けている。また、コンブレーを懐かしがって、パリに居ると寿命が縮まると言いながらも、コンブレーに帰ることもなく、彼女の娘に至っては田舎を軽蔑しているのである⁽²⁶⁾。パリではもはや、白いボネットと忠誠が取り柄のコンブレーの女中は姿を消し、新しい下僕に「女中頭」(*gouvernante*) と呼ばれて悦に入っている彼女の姿がある(この時の彼女の本当の身分は相変わらず料理人兼小間使であり、先に見たようにスワン家ほどの規模の召使を抱えていない話者の家には女中頭など必要ない)。彼女はこの下僕を「私の下男」と呼び、彼がフランソワーズを "Madame" とか "vous" と呼ぶのに対して、彼には "mon garçon" とか "tu" と呼びかけている⁽²⁷⁾。「小間使の日記」の中にヒロインが主人に "ma fille" と呼びかけられて反抗心を燃やす場面があるが⁽²⁸⁾、"mon garçon" という呼びかけは、主人の下僕に対する呼びかけでもある。つまり、フランソワーズのスノビズムは忠誠心から来る主人一家との一体感を超えて、彼女自身がブルジョワ家庭の女主人になりきっているのである。

パリでのフランソワーズはまた、主人へのサービスよりも同僚や同じ階級に属する人々との交際を優先する。バルベックではカフェの主人や他家の小間使との交際に忙しくそのために話者の祖母をないがしろにし、滞在先のホテルの従業員たちと親密になったために、話者と祖母がホテルの従業員たちに用事を言いつけたくても、迷惑を掛けてはいけなからと言いつけに行くのを拒否する。こうしたフランソワーズの礼儀作法 (**protocole**) をマルタン＝フュジェは、パリに上京したフランソワーズが7階の屋根裏部屋での生活によって身に着けた、同じ階級に属する人々との連帯の産物と見ているが⁽²⁹⁾、筆者はむしろ、そこに「失われた時」の殆どすべての登場人物に共通のスノビズムの発現を見るのである。不治の病に罹り死を前にしたスワンを、夜会に出かけるために追いつ返すゲルマント夫妻と同じく、フランソワーズにとっての最優先事項は「社交」であり、ブルジョワのヴェルデュラン夫人があたかも大貴族のサロンなど存在しないかのように振る舞うのと同じく、フランソワーズにとって上の階級に属する人々が自分の社交生活を脅かし始めるや否や、存在しないも同然に無視するのである。先に見たように、フランソワーズの自尊心が主人の家の「格」に依拠している以上、奉公をやめることは彼女には論外である。しかし、主人へのサービスが同僚のお喋りや食事や息抜きといった彼女の社交生活を脅かすのは迷惑なのである。話者の父が朝食に（毎朝買いに行く）クロワサンのかわりに（買いだめができる）ビスコットを食べる習慣を取り入れたときのフランソワーズの不満は、なすべきサービスが減少すれば召使は解雇されるのではないかという懸念に由来するが、同時にまた「この世が存続する限り・・・私たち(＝召使)に自分たちの気まぐれを行わせる主人たちが居る。」とも断言するのである⁽³⁰⁾。彼女はここで、たとえ行うべきサービスが無くなったとしても、お互いのスノビズムを満足させるために相手を必要としている主人と召使の相互依存の関係を本能的に見抜いているのである。

フランソワーズが嫌悪するのはユーラリやアルベルティーヌや「ジョットーの『慈愛』」のような、フランソワーズの目から見て主人の好意につけ込み、

富の分け前に与ろうとする人々である。こうした嫌悪はどこから来るものであろうか。プリミティブな社会においては、無償の施しは権力の証であった⁽³¹⁾。中世の封建君主たちはだからこそ施しを義務と見なしていた。従って、もしフランソワーズが「コンプレー」で描かれているような、聖王ルイやジュヌビエーブ・ブラバンと同時代を生きている本物のナイーブな農婦なら、社会的優位に立つ主人の一族が無償で人に施すのをむしろ美德の一つと見なしたことだろう。ところがフランソワーズは無償の施しを損失と見なし、見返りの等価物を返礼として贈れもしないのに、話者の一族のところに来て金品を受け取る人々を「能なし」(*propre à rien*⁽³²⁾)と呼んでいる。何度か繰り返されるように、彼女は決して吝嗇なのではない。むしろ、主人の財産を「母性的な残忍さ⁽³³⁾」で守りたいと願っている。こうした彼女の道德観は、貧困を能力の欠如の結果と見なし、節約と勤勉を至上とするブルジョワの道德観に他ならない。従って、年老いて目が悪くなってからもなお、話者が運転手に与えるチップの金額までもを監視するフランソワーズは嫉妬深い召使であるよりも、主人一家の財産の後見人であり、その残忍なまでの細心さは、家中に鍵を掛け、庭の梨の木に成った実の数や角砂糖の数までを数えている「小間使の日記」の女主人の田舎のブルジョワジーの猜疑心に通じる。

フランソワーズが軽蔑するのは未婚の母や孤児である。主人である話者の一家が妊娠した女中に寛容であり、話者の母が、息子のアルベルティーヌとの同棲を快く思わないにも拘わらず敢えて反対するのを控える一方で、フランソワーズは身重の女中に嫌がらせをし、アルベルティーヌを容赦なく "*charlatante [sic]*" と呼ぶ⁽³⁴⁾。また、若い女性の訪問者が話者の部屋に来ると、聞き耳を立てたり、覗き見たりする。さらに、話者の一家が形式よりも精神が大事だという基準から、レオニー叔母の死後、形式張った喪に服するのを避けているのに対して、喪に相応しい言動や服装をしないのは親族をないがしろにするものだと言って、主人たちを非難する。またコンプレーの「就寝の劇」で、息子の神経質な性格に屈して譲歩した話者の母と違って、フランソワーズは話

者が神経過敏な面を露呈しそうになると無視して、聞く耳をもたないふりをする(35)。こうしたフランソワーズの言動は、主人である話者の母よりずっと保守的なブルジョワ家庭の母親の言動に他ならない。

19世紀の召使の様々な役割のひとつには、主人の一族の死を看取り、育児を手伝うという役割があった。つまり主人一家の世代交代を見守り、家の存続に手を貸す後見人の役割である(36)。場合によっては献身的な召使は、亡くなった女主人の後を継いで、遺された子どもたちを立派に育てるという仕事も引き受けた。ゴンクールやユイスマンスの作品の中では、「わが家に昔からいた女中」の存在が、主人自身の存在の過去との継続性の拠り所ともなっていて、とりわけゴンクールにあっては亡くなった母親の代理人にも等しい存在であったのが見られる(37)。コンブレのレオニー叔母、祖母、母といった話者を取りまく女性達に仕えてきたフランソワーズはこれらの母親、または母親的な人々の代理人でもある。彼女に対する話者の感情が愛情と憎悪との間を揺れ動くのは母親に対する両義的な感情と同質のものである。そして、男性であれ女性であれ、ブルジョワ家庭の精神の後見人であった召使という階級は政治的にはしばしば主人自身よりも保守的だった(因みにフランソワーズは王党派である)。これは先にも見てきたように、召使のスノビズムの存続が、主人の属する19世紀ブルジョワ階級の存続を前提としていたからに他ならない。

IV

以上のように、ブルジョワ的価値観を主人よりもラディカルに内面化してきた「わが家の老女中」ではあるが、彼女の価値観にも変化が訪れる時が来る。それは時代の波による変化である。彼女の変化はまず、言語の変化として現れる。彼女は話者がその中にアンシャン・レジームの遺物を見ていた田舎の方言を棄て去り、代わりにさまざまな流行語を使い始める。また、富と善が同義語であったフランソワーズの世界観も、第一次大戦中には変化する。彼女と給仕頭 (*maître d'hôtel*) は「金持ちは戦争の時も安全な所に待避している」

と信じているから、金持ちのサン・ルーが勇敢な軍人であるなどとは決して信じない。自分より上の階級に属する人間たちへの無条件の尊敬といったナイーブな農婦の感覚のかわりに、富める階級への不信感という都会の庶民感覚を身につけている。そして富と善の一致というフランソワーズの世界観の基盤が崩壊してしまうと—同時にそれは守るべき価値の崩壊でもあるから—自分の仕事への誇りももはや持たず、サービスもあまりしなくなる。代わりに彼女はサン・ルーの戦死の報告に涙しながら、「知り合いの戦死」のニュースが新聞に出たら必ず知らせてほしいと同僚の給仕頭に念をおすのである。つまり、19世紀ブルジョワ家庭の価値の後見人としての彼女が持っていたスノビズムは、大戦中に変質し、20世紀末の大衆消費社会に生きる我々になじみ深い、マスメディアとの関わりにおけるスノビズム³⁸へと変化するのである。

今世紀初頭にはパリに約21万人居た召使が減少しはじめるのは1906年頃からであり、それはまずフランソワーズのような一人でも何かをも引き受ける女中 (*bonne à tout faire*) の減少からはじまった。主人の家族の埒外の一員といった位置を占めてきた召使という階級は他の労働者階級と違って労働運動や組合結成をすることも殆どなかったが、数少ない召使の労働組合が結成されたのは召使の減少が問題になり始めたこの頃である。バルベックのエレベーター・ボーイがフランソワーズを指すのに "*domestique*" とか "*cuisinière*" という言葉の代わりに "*employée*" という言葉を使い、"*maître*" という語を避けて "*patron*"、"*place*" の代わりに "*situation*" と言って話者を戸惑わせるが、実際 "*domestique*" という語に替わって "*employé(e)* (または *gens de la maison*)" という用語が生まれたのも今世紀初頭のことである。そして、週休の権利の獲得や労災保険といった労働者の諸権利を召使たちが要求し始めたのもこの時代であった⁽³⁹⁾。

マルタン・フュジエはアンシャン・レジームの召使の理想像として13世紀のロンバルディアの召使、聖女ジット(召使と労働者の守護聖人)を挙げ、聖人伝においてこの聖女は地上の主人を神の代理者と見なしていたとされると述べ

ている(40)。召使の滅私奉公が神への奉仕と同一視されていたアンシャン・レジームの崩壊後も、ラマルティエヌの「ジュヌビエーブ」(1850年)に見られるように、滅私奉公の倫理的価値はその痕跡をとどめていたが、やがてフロベールの「純な心」(1877年)においては召使フェリシテの超越的な価値との繋がりをもはや持たない盲目的服従はただのカリカチュアと化し、最終的にはコームリーとパンションの一連の漫画「ベカシーヌ」(1906年以降)において、気の良い召使の時代錯誤的な滅私奉公が笑いの対象となる(41)。召使の主人への献身というテーマは、19世紀後半から20世紀にかけてこうして徐々に超越的価値から遠ざかって行った。この歴史的文脈にフランソワーズを置いてみると、彼女の存在が、アンシャン・レジームから今世紀初頭にかけて、女性の召使の辿った運命を要約しているのに気づく。コンプレーからパリに移住したフランソワーズの変化を地方とパリの召使の居住スタイルの違いによって説明するマルタン＝フュジエとは異なり、筆者は「失われた時を求めて」全体を通して変化していくフランソワーズの姿こそ、時の流れの中で変化し、やがて滅びゆく召使という階級の、超越的価値との訣別の記録であったと考えるのである。

(1) 1878年のパリ万博当時、既に成人していたオデットは、当時と変わらぬ姿で第一次世界大戦後のゲルマント大公妃のマチネーに登場する。Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Edition publiée sous la direction de Jean Yves Tadié, Paris, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1987-1989, vol. IV, p.526. また話者の幼年時代に、フランソワーズにはすでに嫁いだ娘や孫が居る。Marcel Proust, *Op. cit.*, I, p.53.

(2) M. Proust, *Op. cit.*, IV, p.435.

(3) M. Proust, *Op. cit.*, IV, p.610.

(4) A. Martin-Fugier, *La place des bonnes, La domesticité féminine en 1900*, Edition Grasset et Fasquelle, 1979 (Réédition, Livre de poche, 1985)

(5) Marcel Proust, *Op. cit.*, I, p.151.

(6) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.499.

(7) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.106.

(8) Anne Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.223.

"La richesse était pour elle [=Françoise] comme une condition nécessaire de la vertu, à défaut de laquelle la vertu serait sans mérite et sans charme." M. Proust, *Op. cit.*, II, p.321.

(9) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.117.

(10) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.33.

(11) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.52.

- (12) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.149.
- (13) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.120, p.475, II, p.793.
- (14) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.115.
- (15) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.251.
- (16) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, pp.246-249.
- (17) Octave Mirbeau, *La bonne in Contes cruels*, , Librairie Séguier, 1990, Tome II, p.171.
- (18) この点については、パリと地方における道徳観の違いを根拠に反論も可能であろう。しかし、例えばモーパッサンが、「女の一生」の中の女中、ロザリーの場合や、短編、「放浪者」、「告白」を通じて、ノルマンディーの農婦達にとって処女性など何の価値もない、と語るとき、農婦の拝金主義や物質主義を戯画化する意図があったことをマルタン＝フュジエは指摘し、モーパッサンの主張とは対立する1882年の医学的統計をも例示している。(Martin-Fugier, *Op. cit.*, pp.322-323) 同じ地方を舞台にしたモーパッサンの短編でも、「ロザリー・ブリュエダン」のように農婦の拝金主義がテーマとなっていない作品では、妊娠を隠して働く女中の嬰兒殺しがテーマとなっている。また、前掲のミルボーの短編、「女中」では、未婚の母となってパリの奉公先を追われたヒロインが、帰ってきた故郷の村でも差別されている様子が描かれている。
- (19) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.105.
- (20) M. Proust, *Op. cit.*, I, pp.475-476.
- (21) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.85.
- (22) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.80, p.90.
- (23) Archives Murat, citées par A. Martin-Fugier dans *Op. cit.*, p.78.
- (24) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.219.
- (25) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.319.
- (26) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.446.
- (27) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.325.
- (28) O. Mirbeau, *Le journal d'une femme de chambre*, Flammarion, 1983, p.44.
- (29) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.243.
- (30) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.327.
- (31) Marcel Mauss, *Essai sur le don, Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques* in *Sociologie et anthropologie*, Quadrige/P.U.F., 1985, p.271.
- (32) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.326.
- (33) M. Proust, *Op. cit.*, I, p.106.
- (34) M. Proust, *Op. cit.*, III, p.867.
- (35) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.310.
- (36) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.171.
- (37) J.K. Huysmans, *En ménage dans Œuvres complètes*, Tome IV, Les éditions G. Crès et cie, 1928, pp.20, 27, 32.
- E. et J. de Goncourt, *Journal, Mémoires de la vie littéraire*, texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, Tome I 1851-1865, Robert Laffont (Collection Bouquins), 1989, p.841.
- (38) ユルゲン・ハバーマス, 「公共性の構造転換」[第二版]」, (細谷貞雄、山田正行訳) . 未来社, 1990年(1994年), p.228.
- (39) M. Proust, *Op. cit.*, II, p.156. A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, pp.273, 371.
- (40) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.153.
- (41) A. Martin-Fugier, *Op. cit.*, p.170.